

前回は、「自然奇跡物語」の中から『パン増やし』の奇跡について書きました。この話で福音書記者たちは、イエスが「パンを増やした」ことではなく、「〈神の国〉がここに実現している」「〈神さまのお取り仕切り〉とはこういうことなんだ」と伝えたかったのです。

今回は、『ああ、そうなんだ塾』でおなじみの山浦玄嗣先生が、この箇所をどんなふうにお読みになっているかをみていきましょう。聖書を読む際、私たちはその時代的・社会的・民族的背景などを知り、その時代に生きたひとりの人間として、想像力をはたらかせてメッセージを受けとる必要があることを先生はいつも教えてくださいます。きょうも〈聖書の旅〉をたのしみましょう。

✦ 〈奇跡〉物語（1） 『5つのパンと2匹の魚』について（その2）

前回「パン増やし」の話を書くのに、4つの福音書の中の『ヨハネ』を選んだのは、『ヨハネ』の記事は共観福音書（マタイ・マルコ・ルカの3書をこう呼びます）の記事にくらべると非常に具体的である』という山浦先生の文があったからです。

なにが「具体的」なのか。前回の引用箇所の中に『過越祭が近づいていた』『草がたくさん生えていた』という記述があり、季節が明らかにされています。さらに、弟子たちについては「フィリポ、シモン・ペテロの兄弟アンデレ」と具体的な名前が出てきています。ほかの福音書には弟子の名はありません。

いちばんの特徴は、ひとりの〈少年〉が登場することです。「5つのパンと2匹の魚」を差し出したのは、この少年でした。先生は『こういうのを「当事者しか知り得ない具体的供述」というのではないか』と書いています。

「むずかしいことを やさしく/（科学万能主義と人間的常識に凝りかたまつた私たちが）理解できそうもないことを/ 納得できるように」説明してくださる《聖書註釈界の井上ひさし》山浦玄嗣先生の「パン増やし」の話をお聞きしましょう。

少年は、イエスの話を聴いていた …

『おそらく事実は次のようなことだったのではないかと山浦先生は書いています。要約すると、次のようになります。（『 』内は山浦先生の文から、または『ヨハネ福音書』からの引用。）

イエスの話を聞きたい大勢の人たちが集まっていました。もう夕飯の時刻です。みんなお腹が空いてきました。この人たちに食べ物を用意したいのですが、イエスは自分の食事さえ時にはありつけないこともある旅の者です。5千人以上の人たちの食糧を買うお金なんて持っていません。なんたって、みんなに食べさせるためには少なくとも（今のお金で換算すれば）200万円以上必要です。そんな大金、あるはずありません。その時、弟子のアンデレが『ここに大麦のパン5つと魚2匹を持っている少年がいます。』と知らせに来ました。

少年は、イエスの話をもらさず聴こうと一生けんめいでした。10代半ばくらいの歳でしょうか。生きることの意味、思春期ゆえの疑問や葛藤について思い悩んでいたかもしれません。

イエスは、どのような話をしていたのでしょうか。山浦先生は『「神様のお取り仕切り（＝「神の国）」とは何かということをお話して聞かせていたに違いない』と想像します。『神さまのお取り仕切

りに身をゆだねるということは、神さまのお望み通りに生きるということだ。神さまのお望みとは、すなわち人々が皆等しくあれということである。互いに相手を己のごとくに大事にするということである』 — という話を。

「これをみんなで分けよう」

その話を聞いていた少年は、『さっそくイエスの教えを実践した』のだ、と先生は言います。『ぼく、これだけならもっているよ。これをみんなで分けよう』。

2千年前のガリラヤで、多くの人たちが自分の町や村を離れてイエスの話を聞こうという場合、『弁当を持たずに出てゆくはずはない』のです。また、この群集の中にはローマ帝国の支配に反発し、新しいユダヤ帝国を建て直そうと考える『熱血に溢れた過激派がわんさと混じって』もいました。彼らは何日も食べられるだけの食糧を持っていたはずです。一方、貧富の差が大きい時代だったので、何も持っていない人たちもいたかもしれません。弁当は自分のいのちを維持するために必要なものですから、弁当持参の人たちが何も持っていない人たちに「さあどうぞ」と、何のためらいもなしに差し出せるものではなかったのです。

でも、少年は持ってきた大麦のパン5つと魚2匹を差し出したのです。彼がもっている「すべての食べ物」を！ それを手にしたアンデレは、この少年をどう見たでしょう。少年は、あしたも必要になるだろう弁当を手渡したのです。アンデレは、その思いもよらぬ少年の行為を驚きとともにイエスに伝えました。イエスも心を動かされたに違いありません。「この年端のいかない子が、自分の食物をすべて差し出すなんて …」。

そして、奇跡は起こった！

イエスは少年の行いに神のはたらきを感じながら、5つのパンと2匹の魚をおよそ5千人(以上の)人たちに『分け与えられた』とあります。

しかし、山浦先生は『そんなはずはない』と言います。『あまりにも馬鹿げている』とさえ書いています。なぜなら、イエスが『「奇蹟でパンを増やした」などという文句は一言も書いてない』と。前回の雨宮慧先生と同じですね。

山浦先生は、イエスがパンを増やしたのではなく『この純真な少年の行為を目の当たりにした大人たちが、「俺のも使ってくれ」と次々に自分の弁当を差し出したのだ』と考えます。『車座に座った人々の真ん中に、パンと干し魚の山ができた。人々はそれを互いに分け合い、満腹するまで食った。これこそが「神さまのお取り仕切り」がこの人々の間に成立したという「しるし」だった』と。

目に見える「神さまのお取り仕切り」を導いた少年

一人の少年の行いが、それを見た大勢の人たちの心を動かし、自分たちのもってきた弁当を〈他者のために〉差し出した — これこそ、〈神の国〉は「私たちの間にある」ことが目に見えるかたちになった出来事だったのです。

その〈奇跡〉を導いたのは、ひたすら神さまを信じ、イエスの言葉をこころのいちばん深いところでつかまえ、み旨にしたがって生きようとする純真な一人の〈少年〉でした。

『このことのほうが、パンをポンポンと増やしたという「打ち出の小槌」みたいなお伽話よりも、はるかに感動的な話ではないか』と、山浦先生は結んでいます。わたしもそう思います！

遠藤周作氏にとって「奇跡」とは

わたしが聖書を初めて手にした頃、とくにこの「奇跡物語」に関しては「う～ん、…」と、いわば思考停止の状態になりました。そんなわたしの心境を見透かしたかのような絶好のタイミングで、遠藤周作氏の『イエスの生涯』という本が出ました。今はもう、表紙カバーはもちろん、全体が薄茶色に変色した本の出版年を見たら、〈昭和 48 (1973) 年 10 月 15 日〉とありました。42 年前の本にも、やはり鉛筆で傍線が数か所引いてありました。その中から、遠藤氏の「奇跡」に対する考え方を取りあげてみます。

〈同伴者〉としてのイエス

『… イエスはこれら不幸な人々に見つけた最大の不幸は彼等を愛する者がいないことだった。
(中略) 必要なのは、「愛」であって病気を治す「奇蹟」ではなかった。人間は永遠の同伴者を必要としていることをイエスは知っておられた。自分の悲しみや苦しみをわかち合い、共に涙をながしてくれる母のような同伴者を必要としている』。(傍線は筆者。以下同様)

マザー・テレサの言葉を思いうかべた方がいらっしゃると思います。彼女はだれにも認められず・愛されなかった人たちの〈同伴者〉として、その生涯を捧げました。彼女はその人たちの中に「イエスを見ていた」からです。

『彼はただ他の人間たちが苦しんでいる時、それを決して見棄てなかつただけだ。女たちが泣いている時、そのそばにいた。老人が孤独の時、彼の傍にじっと腰かけていた。奇蹟など行わなかつたが、奇蹟よりももっと深い愛がそのくぼんだ眼に溢れていた』。

「彼」は、あの森田ミツです。吉岡の、ハンセン病患者さんのそばにいたミツです。イエスは、ミツと共にいたのです！

遠藤氏はこの本で〈奇蹟など行えなかつたイエス〉を描きました。「奇蹟」を行うよりも、苦悩する人間の傍らに「永遠の同伴者」として立つイエス。それは「日本人としての血を受けつぎながら、はたしてカトリック者たることができるのか」という氏の文学の根本的な主題への「一つの回答」です。(当時この本は、一部のカトリック教会で「禁書」になりました …。)

「小説家が、日本人につかめるイエス像を書き、実感をもって理解していただく」

『イエスの生涯』の「あとがき」に、遠藤氏は次のように書いています。

『… 私は日本人につかめるイエス像を具体的に書くという課題を自分に課した。(中略) この本に描かれたイエスの生涯には — 多くの聖職者、神学者の不満は承知しながら — ユダヤの旧約の完成者としてのイエスの姿はない』。

『聖なるものを表記することは小説家にはできぬ。私はイエスの人間的生涯の表面にふれたにすぎぬ。ただ日本人である私がふれたイエス像が基督教に無縁だった読者にも少なくとも実感をもって理解して頂けるものであったならば、この仕事は無駄ではなかつたような気がする』。

遠藤氏が「小説家」として、「日本人にも理解できるイエス」を、教会からの非難を覚悟の上で書いた作品 — それが『イエスの生涯』です。この本を読む前、わたしにとってイエスは「異次

元の人」でしたが、読後、「この〈同伴者〉としてのイエスなら、ついて行けるかもしれない …」と感じました。わたしの心のいちばん奥底に、「信仰の種」を蒔いてくれたのは遠藤周作氏でした。

その種は、時の経過・人との出会いとともに少しずつ生長していきました。「奇跡」に対する受けとり方も同様です。それについては後日書きます。

今回は「治癒奇跡物語」について考えましょう。

【引用・参考にした書籍】 ・山浦玄嗣『走れ、イエス』 ・日本聖書協会『聖書 新共同訳』
・遠藤周作『イエスの生涯』（新潮社、1973）